

ブ
ラ
コ
ン
ラ
プ
ソ
デ
ィ
ー

二〇〇七年太陽系第三惑星地球。

地球と言っても『ちきゅう』と読んではいけない。地球は『ちたま』と呼ばれる星で、地球が浮いている銀河系の双子銀河にある双子星である。

第一章 きっかけ

うちの両親は、俺が小さい頃から共働きで、母さんの仕事が長引いた日の晩や、土曜日の昼のご飯は、三人居る兄弟の内、一番上の兄のカナメ兄ちゃんがよく作っていた。

始めの内は拙いながらもレシピを見ながら、その内に冷蔵庫の中にある物で大体まかなって作られた料理は、母さんの作る料理とは少し違って、でも美味しくて。

そんな料理を食べて育った俺は、いつかカナメ兄ちゃんに俺が作った料理を美味しく食べて貰おうと、中学に入る頃には調理師学校に進もうと心に決めていた。

しかし、心に決めたその矢先、カナメ兄ちゃんが服飾の学校に通う為に家を出て東京で暮らす事になり、その時に、カナメ兄ちゃんと離れたくなかった俺は相当ごねてしまった。

この家からでも通えないのかとか、そう言う事で。でもよく考えたら通学時間は短い方が良いし、俺よりも小柄で、少し

体の弱いカナメ兄ちゃんには余り負担をかけられない。

夏休みとかには偶に帰ってくるからと、その言葉を信じて、俺はカナメ兄ちゃんを見送った。

それから数年。

俺は無事に調理師学校を卒業して、大手では無いけれど、食品メーカーの開発部に就職した。

色々と出された企画を商品化する為に、どの様な加工をすればいいのかの研究をしている。

結局俺も東京に出て、狭いアパートの一室を借りてそこから出勤している訳なのだが、偶に実家に帰る事もある。

盆暮れ正月とかそう言うタイミング。でも勿論帰りはするけれど、それ以外の時にも帰る事はある。

仕事の合間の休憩中、俺のスマホが音を立てた。
何かと思ったら、母さんからのメールだ。

驚くほど誤字の少ないメールには、今度の土日にカナメ兄ちゃんが実家に行くと言う旨が書かれていたので、俺は素早くスマホの画面をタ

ップして返事を返す。

次の土日は、俺も仕事が休みだ。

金曜の夜位から実家に行けたらなと思うんだけど、金曜定時で帰れるかな……

そして金曜の夜。

結局三時間程残業をする事にはなったが、なんとかその日の内に実家に帰れた。

実家に向かう長い電車の中で、スマホを眺める。

左手でしっかりと、落とさない様に持ち、ロックを解除する訳でも無く、ただロック画面を眺めている。

ロック画面に設定されている画像は、一見すると少し奇抜な格好をした可愛らしい女の子が写った写真なのだが、俺はこのロック画面を絶対に家族には見せない様にしている。

何故なら、この写真は、女装したカナメ兄ちゃんだからだ。

その写真を見ながら、口元が緩むのを必死に堪える。

ああもうほんと可愛い。

カナメ兄ちゃんが女装を始めたのは高校の時で、文化祭の時に漫研の出し物でメイド服を着たのがきっかけだったらしいんだけど、なんで俺は見に行かなかったんだろう。

行けば良かったのにと心底後悔している。

その後、オタク系のイベントに行っては女装コスプレをして居る様で、その写真は本人直々に見せて貰った事が有る。

未だにカナメ兄ちゃんは女装コスプレをイベントでしている様で、ネットで検索したらコスプレのSNSに写真を上げているのが見つかった。

偶に男のコスプレもしてるけど、もうとにかく女装が可愛くて、こっそりとバレない様なハンドルネームでSNSに登録し、日々チェックしている。

昔から、いつの間にか、カナメ兄ちゃんにただの兄弟と言うだけでは無い思いを抱いていた俺にとって、自分が見ている事を想定されてはいないというのがわかっていても、この可愛い女裝をした写真群はたまらない物。

流石に実家に来る時は女裝はしていないけど、それでも俺はカナメ

兄ちゃんに会えるのを毎回楽しみにしてるし、カナメ兄ちゃんに俺の作った料理を食べて貰おうと、連絡がある度に、一足先に実家へと向かうのだった。

俺が実家に着いた翌日の昼、泊まりの着替えか、少し大きめの荷物を持ったカナメ兄ちゃんが実家にやってきた。

「ただいまー」

「あらおかえり。」

ユカリも来てるよ」

カナメ兄ちゃんの声と母さんの返事を聞いて、俺は読んでた料理雑誌をテーブルの上に置いて立ち上がる。

「ああ、ユカリも来てたんだ」

テーブルの脚の側に荷物を置き、そう言って微笑むカナメ兄ちゃんに、俺はこう訊ねる。

「うん、俺も来たんだよね。」

カナメ兄ちゃん、お昼ご飯何食べたい？
それとも食べてきた？」

「まだ食べてないんだけど、そうだなあ。

卵があったらオムライス食べたい」

少し口を尖らせてそう言うカナメ兄ちゃんのリクエスト通り、俺は早速オムライス作りを始める。

カナメ兄ちゃんのリクエストは大体いつもオムライスなので、昨夜の内から卵とご飯の準備は万端だ。

オムライスと言っても種類は沢山有る。

ケチャップライスのオムライスに、ドライカレーの入ったオムライス。五穀米のオムライスもあるしかけるソースだって千差万別だ。乗せる卵だって、トロトロだったり少し固めだったり。

今日はどんなオムライスにしようかなと思いつながら、俺達兄弟がこの家に居た頃から使われている大きな冷蔵庫と、上の段にオーブン機能を果たさなくなったオーブンレンジが置かれているレトルト食品の棚を見ていると、カナメ兄ちゃんが好きな、きのこたっぷりハヤシライスのレトルトパックがあったので、今回はオムハヤシに決定。

親の代から使い込まれた中華鍋の中にカナメ兄ちゃんと、母さんと、父さんと、俺、四人分のご飯を入れて、火を入れながらハヤシライスの

ルーを絡める。

それをまずお皿に盛り、次は卵だ。

良く溶いた卵を、たっぷりのバターを引いたフライパンに入れ、くるくると丸めていく。

それを一個ずつハヤシライスの上に乗せて、切れ目を入れると卵がとろろと割れて、半熟オムライスの出来上がりだ。

早速オムライスと、大きなケチャップのボトルをテーブルに運び、皆でいただきますをする。

「美味しいなあ、美味しいなあ」

嬉しそうにオムライスを頬張りながらそう言うカナメ兄ちゃんを見て、天にも昇る気持ちだ。

少しケチャップを口の周りに付けながら食べている所の写真を撮りたいたのは山々なのだが、にぶいカナメ兄ちゃんはともかく、両親から不審がられるだろうし、ロック画面を見られたらいたたまれない気持ちになるのが目に見えているので、機嫌良くオムライスを食べるカナメ兄ちゃんの事を、俺もオムライスを食べながらじっと観察していたのだ。

その日の夕食は、母さんとカナメ兄ちゃんが少し離れたスーパーと一緒に食料の買い出しに行ってきた。カナメ兄ちゃんが作った。

いつもなんていう料理なのかわからない、名状し難い物を作るんだけど、どれも美味しい。

大好きなカナメ兄ちゃんが作ったごはんをお腹いっぱい食べて、お風呂に入って、寝支度をする。

俺もカナメ兄ちゃんも、適当なTシャツにルームパンツに着替えている。ふと、母さんがこう言った。

「ところであなたは何処で寝る？」

ユカリは、あなたのベッド空いてるけど、カナメとアレクのベッドは物で埋まっちゃってるのよ」

我が家は元々マンション住まいで狭いというのはあるのだけど、とにかく物量が凄いので、昔カナメ兄ちゃんと、その下のアレク兄ちゃんが使っていたベッドは俺が高校を卒業した辺りで既に物置と化していたのだ。

そう言う訳なのだが、流石にカナメ兄ちゃんを床で寝かせるわけに

はいかない。仕方ない、俺のベッドを使って貰って俺が居間で寝るか。そう思ったけれど、ふとひらめいた。

「カナメ兄ちゃん、俺と一緒にベッドで寝ない？」

「んゝ。良いけど、僕寝相悪いよ？」

若干混じった俺の下心にも気付かず、カナメ兄ちゃんはクスリと笑って俺の頭を撫でた。

自分よりも背が高い俺の頭を撫でるのに少し背伸びをしているカナメ兄ちゃんを見て、思わず抱きしめそうになるけれどぐっと自重する。「大丈夫大丈夫。」

ベッドに柵付いてるから落ちないって」

「そうだね。じゃあ一緒に寝ようか」

こうして狭い二段ベッドの一段目に、二人一緒に寝る事になった。

そして翌朝。起きるとなんか腕が重い。

何かと思ったら、カナメ兄ちゃんが俺の腕にしがみついて、すやすやと寝息を立てて寝ていた。

その事にやや興奮気味になりつつも、離れるのが嫌で動けないで居た

ら、ふとカナメ姉ちゃんが寝言を言った。

「んんう……美夏……」

甘える様な口調で言われた聞き覚えの無い名前に、俺は思わず奥歯を噛みしめた。

第二章 付き合い

今日も今日とて新商品の開発。

色々な検査器具や、試作品と向かい合う事暫く。そろそろ頭と舌が疲れてきたぞと言う頃に休憩時間になった。

いくつもの試作品を食べては居た物の、そんな大量に食べているわけでは無いのでお腹は空いている。

社食に行って何か軽食でも食べようと部屋を出ようとした俺を、引き留める人が居た。

「あのっ、柏原さん」

「あれ？ 森下さん。なんです？」

声をかけてきたのは、同期の森下さん。

控えめな風情で有りながら、的確な意見を言うのと、いざという時は凜とした態度を取るので研究チームからは頼りにされている人物だ。

その彼女が少し俯き、もじもじしながらこう言った。

「あの、良かったら、一緒にお昼ご飯なんかどうかなって思ってる……」

「一緒にしません？」

「良いですよ」

正直な所、研究チームの誰かと一緒に食事をする、その時も仕事の話になりそうな気がして普段は一人で食事をしているのだけれど、森下さんの様子を見る限り、勇気を振り絞って。という感じがする、で無碍には断れない。

ただ、休憩中は仕事の話は無しで。とそれだけ伝えて一緒に社食へと向かった。

我が社の社食は、食料品メーカーと言うだけ有ってメニューも豊富だし栄養のバランスが取れた物も多い。

森下さんが選んだのは、野菜中心のBランチで、俺が選んだのは豆腐料理とサラダがセットになった日替わりランチ。

植物性タンパク質に重点を置く俺としては、日替わりとは言え豆腐をメインに扱ってくれるランチは有り難い。

なんで植物性タンパク質に拘るかという、日々家で筋トレをしているのでタンパク質補給の為に、低カロリーな植物性タンパク質を積極的に摂っている。

筋トレは調理師学校時代からやっているのだが、おかげでそれなりにすっかりとした体つきにはなっていると思う。

始めたきっかけは不純ではあるけれど単純で、もしカナメ兄ちゃんと一緒にお風呂に入る事が有ったら、その時にだらしない身体は見せられないと思ったからだ。

結局その機会は未だに來ない訳なのだけれど、温泉とまでは行かなくとも銭湯くらいは一緒に行く機会無いかなあ。と思って居る。

都内にもスーパー銭湯が有るから、俺から誘えば良いのかな？

どうやったらカナメ兄ちゃんと一緒に銭湯に行けるかを考えながら無言でランチを食べていたら、向かいの席に座った森下さんが、暗い顔をして声をかけてきた。

「あ、あの、一緒に食事するの、迷惑でしたか？」

「あいやっ……そう言う訳じゃ無くて、あの、スイマセン。ちょっと考え事してて」

しまった。要らない心配をかけてしまった。

慌てて言い訳をする俺に、森下さんは少し拗ねた様な顔をしてこう言った。

「もしかして、彼女さんの事とか考えてたんですか？」

「彼女？　なんでまた？」

俺は突然彼女がどうか言われて戸惑う。

俺は彼女という物が居ないし、居た事も無いし、そもそも彼女が居ると思われていた事自体が想定外だ。

すると森下さんはこう返してくる。

「だって、柏原さんって真面目だし、見た目も良いからやっぱり恋人が居るのかなって」

そういうもんなの？

疑問は残ったけれど、取り敢えず、森下さんに俺には彼女が居ないと言う事を説明して、納得して貰う。

「いやぁ、俺は結構、彼女にするならこう言う子って言うハードル高めに設定してるから、もしかしたら彼女なんて出来ないくらいの勢いかなって」

「そうなんですか？」

どんな子が好みなんですか？

やっぱり可愛くて料理が上手で……とか？」

なんだか弱々しく聞こえる森下さんの問いに、俺はスマホを取り出しながら答える。

「それも条件には入るけど、この人を上回る様な子じゃ無いと自分が納得出来ないなって」

そう言っ、森下さんにスマホのロック画面を見せる。

それを見た森下さんは、びっくりした後、表情を曇らせて俯いてしまった。

「こんな綺麗な人、なかなか居ないですよ。」

この人、元カノとかですか？」

森下さんも十分可愛い部類に入ると思うのだが、まあ、そうだよなあ。カナメ兄ちゃんと比べちゃったら、それは相手が悪かったとしか言えない。

カナメ兄ちゃんが俺の恋人だったらこの上なく嬉しいのだけど、流石にそう言う事実は無いので、森下さんにこう返す。

「いや、俺の兄です。」

昔から料理も上手くて、少し抜けてるし放っておけない所はあるけどそこがまた可愛くて。

なのに他の人には優しいし、色々背負い込みすぎなのが心配と言えば心配なんですけど……」

暫くスマホの画面を見ながらカナメ兄ちゃんの事を語り、ふと森下さんの方に視線をやると、『だめだこいつ』と書かれている様な完璧な作り笑顔を浮かべていた。

とある休日前夜。俺は自宅のパソコンで、高校時代から付き合いのいる友人と音声チャットをしていた。

その友人はカナメ兄ちゃんと同じくオタク趣味が有って、コスプレイヤーの撮影をする為に凄いかメラを持っていたりする。

「篠崎！ マジで頼むよ、いつものレイヤーさんの写真撮ってきてくれ！」

『まあ、今回も合う予定だから撮ってくるけど、お前自分で撮影させて貰わないと親しくなれないぞ？』

「俺はチキンなので致し方なし」

そう言って友人の篠崎に撮影を頼んでいるのは、篠崎には言っていないんだけどカナメ兄ちゃんだ。

篠崎に撮影を頼んで写真を送ってきて貰っているわけなんだけど、結構他のコスプレイヤーさんと写っている写真も有ったりする。

そんなに大勢で写っている訳では無く、いつも同じ女の人と写っている。

カナメ兄ちゃんのやるコスプレはマイナーな物が多いので、同志が少なくてそう言う事になっているのだろうと思う。

本当は送って貰うのはカナメ兄ちゃんがピンで写っている物だけで良いんだけど、それだとカナメ兄ちゃんと仲が良さそうなこの人に悪いかなど思っただけで送って貰っている。

そんな俺に篠崎は、しかたがないなあ。等と言いつつも、今回も撮影を受けてくれる事となった。

それから数日後、篠崎からいつも使っているパスワード制のアップローダーのURLが送られてきた。

俺は早速URLにアクセスしてパスワードを入力し、写真をダウンロードする。

パソコンの中にフォルダを作って整理して、呼吸を整えてからファイルを

開く。

するとディスプレイに緑色のビスチェとホットパンツを着たカナメ兄ちゃんの写真が表示された。

あああああくっそ可愛い！

思わず絶叫しそうになったが、誰が見ている訳でも無いのにあくまでも表情には出さず、クールな素振りで写真を見ていく。

じつくりと写真を吟味し、どれをスマホに送ろうか選ぶ作業の始まりだ。

スマホにカナメ兄ちゃんの写真を送った後、メールで篠崎にお礼を送って、翌日の仕事の為に寝る支度を始める。

でも、あれなんだよな。こうやってカナメ兄ちゃんの写真を送って貰った後は、どうしてもスマホをいじり続けてしまっただけなかなか寝付けない。

過去に送って貰った分も含めてカナメ兄ちゃんのコスプレ写真を見ている内に、段々興奮状態になってきた。

きわどい写真が有るとかそう言う訳では無いし、カナメ兄ちゃん曰く

露出対策はしっかりしているのでそもそもきわどくなりようが無いらしいのだが、座っている所を上から撮った写真なんかは上目遣いになって可愛いし、脚が長く見える様に少し下から撮った写真なんかは脚が美味しいしでもうたまらない。

偶に俺も冷静になる事が有って、カナメ兄ちゃんが男だったのは重々承知しているんだけど、この可愛さの前ではそんな事実が吹っ飛んでしまう。

「だめだわー」

カナメ兄ちゃん可愛いわー」

布団の中で何度も何度も写真を舐める様に見続ける。

楽しい時間な訳だけれど、いつまでもこうしているわけにもいかない。俺はそっとスマホをロックし、枕の下に入れて寝る体勢になる。

昔カナメ兄ちゃんが、『写真を枕の下に入れて寝るとその夢を見る』って言うおまじないを教えてくれて、それを今実行しているのだ。

夢に出てくると良いなあ……